

アーバニズムとアーバニスト

成熟していく都市の循環的な都市デザイン像を求めて



中島 直人 | NAKAJIMA Naoto

東京大学大学院 准教授

1976年東京都生まれ。東京大学工学部都市工学科卒、同大学院修士課程修了。博士（工学）。東京大学大学院助手・助教、慶應義塾大学専任講師・准教授を経て、現職。専門は都市計画。主な著作に『都市計画の思想と場所 日本近現代都市計画史ノート』（東京大学出版会）、『都市美運動 シヴィックアートの都市計画史』（東京大学出版会）、『都市計画家石川栄耀 都市探求の軌跡』（共著、鹿島出版会）。

アーバンデザインセンター高島平の設立

東京都板橋区の高島平は、かつて徳丸田圃、赤塚田圃と呼ばれていた荒川沿いの田園地帯を、高度経済成長期に土地区画整理事業によって市街化した地域である。その中心には、建設当時、都内で初めて一団地で1万戸を超える規模として注目を浴びた高層団地が広がっている。住居表示変更により「高島平」という地名が誕生したのが1969年3月、団地の入居開始が1972年1月なので、高島平はおおよそ50年の節目を迎えたところであるが、この団地を中心に高齢化が進んでいる。結果として、半世紀前に建設されたインフラや住宅、もともと子育てファミリー世代のためにつくられたまちのありかたが高齢化した現住民のニーズと合っていないという課題と同時に、今後、新たに高島平に移り住んでくることが期待される現代の子育てファミリー世代にとっても必ずしも魅力的な環境とはなっていないという二重の課題を抱えている。

板橋区では2015年10月に、高島平地域全体の再生方針を示す全体構想と、小学校跡地やその周辺の公共施設群の再整備の基本計画からなる『高島平地域グランドデザイン』を策定した。上記の二重の課題への対処を目標とした『高島平地域グランドデザイン』は、「にぎわい」、「ウェルフェア」、

「スマートエネルギー」、「防災」の4つのテーマに沿ったまちづくりの方針を掲げた。その方針の実現のため、「継続的な活動支援と新たな活動の育成を担い、まち全体をマネジメントするまちづくりの拠点」、「民、学、公の連携の下で地域に根ざした拠点機能を担う組織体」の設立も構想に含んでいた。そして実際に、2016年11月に「アーバンデザインセンター高島平（UDCTak）」が設立された。

UDCTakが設立と同時に取り組んだのが、先の『高島平地域グランドデザイン』で提案されていた、高島平地域の中央を貫く高島平緑地を生活核や施設を結ぶ都市軸である「プロムナード」として再生する構想の具体化であった。もともと幹線道路と住居地区との間の緩衝緑地として整備されたこともあり、人々の活動の場というよりも遮断の機能性を重視したつくりとなっていた高島平緑地を、いかに「地域の方が自慢したくなる、地域の方の居場所」に変えていけるかについて、プロムナード研究部会（部会長：中島直人）を立ち上げ、地域住民の参加も得て議論を重ね、基本構想案を策定した。板橋区は2018年1月に、その提言内容をほぼ採用するかたちで『高島平プロムナード基本構想』を策定した。基本構想では、全体の方針とともに、優先的に再整備すべき、すぐにでも基本設計に取り組むべきエリアが具体的に提示され

た。しかし、その優先的整備エリアについて、早速、基本設計に入っていくという通常のプロセスは採られなかった。

高島平で都市デザインが会った 地域活動と担い手たち

『高島平プロムナード基本構想』の策定後に実際に始まったのは、社会実験「高島平グリーンテラス」であった。基本構想をもとに、週末などの期間限定で緑地の使い方を実験的に変えてみることで、新たな課題やニーズを把握し、再整備の具体化へとつなげていくことを目的とした取り組みである。その狙いとして特に重要であったのは、社会実験の場のコンテンツの提供を地域の様々な団体に依頼することを通じて、その空間の使い手候補とのつながりをつくることであった。空間整備の後に活動や運営、経営の検討があるのではない。場を生み出す活動、主体が先に十分に想定されてはじめて空間がデザインされるというのは、現代の都市デザインの基本原則であろう。そもそも高島平では、高齢者のコミュニティ維持・形成を担うコミュニティカフェの開設や鉄道高架下スペースを使ったマルシェの開催など、地域課題に対応した地域住民による様々な活動が多発的に展開されていた。そうした活動を行う方々とともに空間のありかたを実験していくこと、それなしには場は生まれようがない。直近では、2020年2月に「高島平緑地に子供の遊び場をつくろう」というテーマのもと、第6回の「高島平グリーンテラス」が、基本構想で子供たちの遊び場としての再生を検討したエリアで開催される予定である。日頃から子供の遊び環境を生み出す活動を展開している地域内外の様々な主体が参画している。使い手のネットワークは、少しずつ拡がりを見せている。

また、2019年度は「高島平」という地名の誕生50年ということで、UDCTakが中心となって50周年記念行事を企画した（実行委員長：中島直人）。UDCTak側がはじめに用意したのは、「高島平ヘリテージ」と名付けた、高島平に生み出されてきた今後も継承すべき都市空間に関する展示会の企画と、そうした空間を一時的に公開する「オープンシティ」の企画であった。しかし、ここでも、高島平地域で活動している様々な組織、あるいはそれらのキーパーソンたちに声をかけをし、企画そのものを一緒に一から組み立てていく過程で、コンセプトはまちを「つくった」という計画者の視点からまちを「生きている」という生活者の視点へと展開され、具体化していった。当初は地域内の活動の多様性を包含する「大学」、最終的にはより多くの方に開かれた場としての「文化祭」が見立てのコンセプトとして共有され、コミュニティ

ビジネス団体から地域ダンスサークルまで、高島平という地域で展開される活動の総覧というかたちのイベントとなった。

果たしてわずか50年という時間がまちの成熟にとって十分なのかどうか、一般論としては語れないが、純粋な計画都市である高島平において、UDCTakとして都市デザインを展開しようとして会ったのは、地域の中にすでに多発的、そして自律的に展開されている地域課題への地域住民による取り組みの数々であり、そこで生き生きと活動する人たちであった。そうした活動の網の目の中において、物的環境（build environment）からまちの再生に取り組みアーバンデザインセンターのなすべきこととは何であろうか。もちろん、公共施設や公共空間あるいは団地そのものの再生を中心としたビジョン、計画策定というプロフェッショナルな仕事は高島平でも依然必要であり、UDCTakのミッションの中心もそこに置かれている。しかし、まちの再生とは果たして、そのような物的な再整備のことを指すのであろうか。成熟していく都市における都市デザインは、どうあるべきだろうか。



図1 高島平グリーンテラス（2018年）

「つくる」と「生きる」のアーバニズム

『都市はどうあるべきか』は

『私たちがどう生きられるか』とほぼ同義である。」

（北沢猛「日本の風景と未来の設計」『都市+デザイン』、no.27、2008年）

今世紀に入った頃から、英語圏では、都市計画や都市デザインの分野において「アーバニズム」という言葉の使用が格段に増えている。例えば、アーバンデザインのレジェンド、ジョナサン・バーネットは「アメリカで

は、「Urban Planning」、「Urban Design」、「Urban Studies」、「Urban History」、「Urban Sociology」などの用語が使われてきた。欧州ではこれらの独立した分野は全て「Urbanism」の一部と見なされてきたし、イギリスでもある程度同様であったが、アメリカにおいても、アカデミックな議論の場で、この「Urbanism」という用語をよく見かけるようになってい

る。」¹と状況を分析している。建築家のキム・ドンセイは、「北米では、この20年ほどの間、異種の形容詞をともなった様々な「アーバニズム」の増加、拡散が生じている。」²として、アーバニズムを形容する言葉の多元化を積極的に評価している。なぜ、こうした状況になっているのか。もちろん、その発端は1990年代に始まったニュー・アーバニズムにある。自動車に過度に依存した郊外開発に対するオルタナティブというかたちで、自動車依存以前の（つまり徒歩を中心とした）都市のかたちを一つの規範として、現代的なニーズに対応するように再提起したのがニュー・アーバニズムであった。ここで大事なことは、ニュー・アーバニズムがニュー・アーバンデザインでもニュー・アーバンプランニングでもなく、「アーバニズム」という言葉を使ったということである。

都市計画や都市デザインにおける「アーバニズム」という言葉は二面性を有している。「アーバニズム」は、そもそもは都市社会学の誕生とともに生まれ、現在も使用されている学術用語である。社会学者・ルイス・ワース（1897-1952）は「アーバニズム」を「都市における生活様式」として定義し、当時のシカゴを念頭に、人口規模、密度、異質性をその要件として提示した。ここでの「アーバニズム」は事実概念であった。一方で、現代の都市デザインにおいて使われる「アーバニズム」は、ニュー・アーバニズムの理論家であるエミリー・タレンによれば、「ある確立された原理に基づく、理想的な人間の居住地を実現させるためのビジョンと探究」³である。つまり、それは規範概念としての役割を持つ。「アーバニズム」という言葉が普及した背景には、この事実概念と規範概念との共棲構造に現代の都市デザイン、あるいは可能性としてのこれからの都市デザインの鍵があるという認識があるのでないだろうか。事実概念が都市の生活、都市を「生きる」眼差しを、規範概念が都市の計画、都市を「つくる」眼差しを表すとすれば、「アーバニズム」は、その両者の融合を含意している。都市を「つくる」と「生きる」との一体的な感覚は、残念ながら都市デザインにも都市計画にもない。

現代の成熟した都市、地域で都市デザインを考える際に、この「アーバニズム」が持つ、「つくる」と「生きる」の密接な関係が極めて重要であることは、高島平での経験からも裏付けられる。純粋な計画都市であった高島平においてで

え、すでにそこで「生きる」人々によって、地域課題を解く活動が、ごく自然なかたちで展開されていた。そこで都市デザインが培ってきた「つくる」アプローチ、つまり物的環境への介入は、地域の活動の網の目の中に織り込まれ、それらと連携することではじめて展開の可能性が見出されるものであった。逆から見れば、「生きる」ことに根ざした活動が「つくる」ことへとシームレスに繋がるということでもある。つまり、成熟した都市において問われているのは、「つくる」と「生きる」の総体としてのまちのありよう、つまりアーバニズムなのである。都市デザインをアーバニズムの視野で捉え直す必要がある。

表1 アーバニズムの構造

事実		生活する
規範	ビジョン	創造する
	探究	

「アーバニスト」たちの都市へ

では、そのアーバニズムの担い手は誰であろうか。建築に対応して建築家が、都市計画に対応して都市計画家がいるように、アーバニズムに対応してアーバニストがいる、と考えてみたい。高島平で出会った活動の担い手たちは、地域で「生きる」のと同時に、「つくる」ことへの一歩を踏み出していた。アーバニズムの根幹が「つくる」と「生きる」の一体的感覚にあるとすれば、アーバニストとは、端的に言えば、その都市を生きながら、都市の課題に応え、新たな価値を生み出していく人々である⁴。「つくる」側にいた、いわゆる従来の都市プランナーが一つの都市や地域に定着したり、あるいは都市や地域で活動を行うことによって「生きる」側になっていくということはこれまでもあった。もちろん、必ずしも「つくる」と「生きる」の場が同じでなくてもよい。どこかの都市や地域で生き生きとした時間や空間を主体的に経験していればよい。

一方で、近年、コミュニティビジネスやローカルディベロPPERなどのかたちで都市や地域に深く入っていくビジネスパーソンや、様々な専門家、例えば、環境・エネルギー、農業、ものづくり、教育、政治・行政、アート・文化、社会福祉、宗教家たちが都市や地域で活動を起し、その環境づく

りにたずさわるケースが増えている。また、アクティブ生活者、あるいはアーバン・インフルエンサーとしか言いようがない、地域で多くの人を巻き込みながら、ことを起し、場を創造していく人もいる。皆、「生きる」と「つくる」をつなげている、ごく自然なかたちで。おそらくこうしたアーバニストに共通しているのは、何らかの思想というよりも、都市や地域に接する姿勢であり、何らかの特定の方法というよりも都市や地域の課題や可能性を読み取るリテラシーである。そして、結果として生み出しているのは空間ではなくて場所なのである。

こうしたアーバニストたちを数多く抱える都市こそが、おそらく、現在、そしてこれからの様々な社会的変動を受けとめ、課題を解決し、生き生きとしたそのありようを維持し続けられるであろうことは、社会資本やレジリエンスといった観点から説明できそうである。また、魅力的なまちには魅力的な人がたくさんいる、という経験則はおそらく正しい。ただし、今いちど、都市の物的環境のデザインに責任を持つ都市デザインという私たちの足場に戻ってこのことを考えたとき、はっきりと問うべきなのは、「アーバニストを生み出し続ける都市環境とはどのようなものか」であろう。

パターンランゲージの応用研究や実践をリードする井庭崇は、消費社会、情報社会の次に想定される未来の社会像を「創造社会」と名付けている。「『創造』、『つくる』」ということが人々の関心や生活における中心적인関心となる時代である。創造社会においては、人々は、自分（たち）が作りたいたいと思うものを自分（たち）でつくることができるようになり、どれだけ自分（たち）が作りたいたいものがつくれているかが、生活・人生における「豊かさ」を象徴することになるだろう。消費やコミュニケーションは、「つくる」という文脈に織り込まれて価値を発揮するようになるのである^{*5}と論じている。また、建築起業家としてもものづくりの民主化を進める秋吉浩気は、「「生きること」と「つくること」が同じ次元にある環境を「自治感覚がある環境」^{*6}と表現している。これらのコンセプトには、アーバニストが見ている世界と同じものがあるように感じる。「つくる」は、もちろん、ものづくりに限定されない。都市の物的環境、あるいはそれを規定す

る認識や仕組みも「つくる」対象だとして、生活と創造を重ね合わせられる、自治感覚が育まれる、そのような都市空間があるのではないか。そして、そうした都市空間こそ、未来のアーバニストたちを育てる土壌となりうるのではないだろうか。環境決定論ではなく確率や可能性、選択肢の問題として、人々の創造性、自主性を導き出す環境について、都市デザインはもっと深く考察し（おそらくそのような環境は歴史的にも見出せるし、むしろ、かつては当たり前のようであったもののように思う。歴史的考察も大事である）、実践的に探究していくべきではないだろうか。

アーバニズムへの注目と同期するように、公共空間への関心が世界的に高まりをみせ、プレイスメイキングやタクティカルアーバニズムが世界共通語となり、広場、公園、街路のありかたが、都市のありかたが変わろうとしている。都市空間を使いこなす、自分たちが望む都市空間を自分たちで作り出す時代がすでに来ている。こうした公共空間ムーブメントも、「アーバニストを生み出す都市環境」を生み出すという視点から意義付けることができる。公共空間ムーブメントは階段の一つであり、その先にあるのは、自らアーバニストを生み出し続ける都市である。数年前、『都市空間の構想力』という書籍のあとがきに、私は次のように書いた。

「私たちは人生のどこかの時点で「都市」に憧れ、魅了されて都市デザイナーを志し、人生を通じて生活者として様々な「都市」で長い時間を過ごし、訪問者として（そして専門家として）多様性に満ちた「都市」に大きな好奇心と時に問題意識を持って向き合う中で、どのような都市空間があり得るのか、いや、どのような都市空間があるべきなのかを構想する力を育んできた。私たちが「都市空間の構想力」と呼ぶものは、実際は私たちなりの都市の見方のことであるが、それは都市自体から与えられてきたものではないだろうか。私たち自身が都市に育まれてきたのである。」

これは現時点では、仮説であり、予感に過ぎない。成熟していく都市におけるこうした循環的な都市デザイン像に向かって、一歩ずつ、進んでいきたい。

注

*1 | Jonathan Barnett (2011), A Short Guide to 60 of the Newest Urbanisms, Planning, 77(4), pp.19-21

*2 | Dongsei Kim(2014), Learning from Adjectival Urbanisms: The Pluralistic Urbanism, GLOBALIZING ARCHITECTURE / Flows and Disruptions, April 10-12, 2014, Miami Beach, FL

*3 | Emily Talen(2005), New Urbanism & American Planning, Routledge

*4 | 「大辞泉」(小学館)によれば、「アーバニスト」には「1. 都市計画の専門家」と「2. 都市に住み、都会の生活を楽んでいる人」の2つの意味がある。ここではその両者の統合を考えたい。

*5 | 井庭崇編 (2019)、クリエイティブ・ラーニング 創造社会の学びと教育、慶應義塾大学出版会

*6 | 秋吉浩気 (2019)、「建築とデジタルファブリケーションの交差点:自律分散型の住環境生産サービスが、『限界費用ゼロ社会』を実現する」(インタビュー)、WIRED、<https://wired.jp/2019/02/14/vuuld/>